

イエスは 主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟



日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創始されたキリスト教の新しい祈禱運動である。

開心・静聴・充滿・献身・奉仕 127

『初めてアシュラムに参加した時の 感激と将来への期待』



佐野 勇松

私はアシュラムの名は若い頃から知っていましたが、実際に参加したのは60歳代になってからでした。箱根芦ノ湖畔のクリスチャン・アカデミーが会場のときでした。出席の動機は、当時教派教会の組織から離れ数人の方々と家庭集会を続けていましたので時々霊的渇きに耐えられない思いを経験していました。このような時先輩の日師からアシュラムの集会に誘われ、あまり気のすすまないままものは試し位の軽い気持ちで参加しました。したがって強く組織された処なれないやだなーと思っていた。

会場に入って見ると正面に「イエスは主である」と大きな横断幕で主題が掲げられていた。待ち時間を「イエスは主である」を見つめながら考えてみた、信仰者にとっては当たり前のことじゃないか、その当たり前のことのためになぜわざわざ集まらなければならないのかと自問自答した。そのとき私は「主」にどのように接しているか、私の知る限りの人の信仰生活に思いをめぐらせてみた。商売繁盛家内安全を求めて元旦参詣に神社に集まる人達ほどではないが、主に求め願う事のみが多い信仰、主に仕えることの少ない信仰に気づかされた。信仰者の間にもこの当たり前のことが当たり前のこととして実行されていない、そのためにことさらに「イエスは主である」を掲げて祈りの輪を広めようというのがアシュラムの集会かと自分なりに納得した。これなら安心と。

やがてオリエンテーションがはじまった。初めて参加された方々のためにと、アシュラムは新しい教派新しい教会を作るためのものではない、日常的には礼拝の場所は違う人々が一堂に会して「主」に共に祈る祈りの共同体である、と。これも納得できた。

次いで、「イエスは主である」との主題を掲げているのですからイエスの他に先生はいない、参加者は牧師も信徒もこの集会期間中はお互いを〇〇さんと呼び合うことがこの運動の創設者スタンレーさんの信仰であった故に期間中は「先生」は使用しないようにとのことでした。このことは大きな感動として受け入れることができた。「あなたがたの師は一人だけであってあとは皆兄弟なのだ」(マタイ23章9節)。御言葉がそのまま実行されているグループがあったのかと嬉しかった。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてあげよう」(マタイ11章28節)。

聖書の記された時代よりも、現代の方が人が生きるのに難しさを感じているのではないかと。今は管理社会だ。生活の隅々まで管理の目がとどいている心身くつろぐ場所がないと言われる。せめて教会だけでも管理から解放された交わりの場であってほしい、そのためにも現在教会用語となっている牧師と信徒の関係の常用語となっている「先生」をアシュラム運動の拡大によって自然に変化することができたなら教会の敷居も低くなるのではと思ってその日の来ることを祈っています。

(裾野坂の上教会牧師)

新約聖書 聖想
『村人の拒絶』

ルカ4・16〜30

函館栄光教会牧師 白川鄭二

ルカ福音書の記しているイエス・キリストのお姿をよく知るには、マルコ福音書と比べるのがよろしい。イエスは荒れ野で八霊Vによる誘惑を受けられてからガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。それから弟子たちを呼び集め、間もなくカファルナウムの町に着き、会堂に入つて權威をもって教え、そこにいた病人から悪霊を追い出された。イエスの評判は忽ちガリラヤ地方の隅々まで広まった。イエスは大勢の病人を癒しながら町々を巡回して宣教されたが、ファリサイ派の人々はイエスが安息日に病人を癒され、民衆の支持を得たのを見て憤激し、イエスを殺そうと相談し始めた。マルコはそのように、力強い神の子イエスの行動が引き起こした人々の反応を描いている。

おられた。両親は息子が見当たらないので、引き返して見ると、イエスは宮の境内で学者らの真ん中に立ち、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。両親が心配していたとイエスを咎めたところ、イエスは「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか」と答えられた。「両親はイエスの言葉の意味が分からなかったが、母はその言葉をすべて胸に収めた」とある。彼が神の子であることは彼のみ業によって現れるが、その神の子が多くの人々のために苦難を受けなければならぬことが、語られて行く。イエスが荒れ野で誘惑を受けた記事はマルコでは僅か二節(1・12〜13)に留まるのであるが、ルカでは多くの言葉が用いられている(4・1〜13)。そこで注目すべき一句は「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた」とある。あのゲッセマネにおけるイエスの苦闘への伏線である。

イエスは受洗と試みによって自分の使命とその方法を鮮やかに意識され、それに基づいてナザレ伝道をしたのであるとルカは言う。聴衆はイエスの言葉を誉め「この人はあのヨセフの子ではないか」と驚いた。しかし、彼らの中にはイエスを信じない者がいて、「カファルナウムで色々な奇跡をしたそうだが、郷里のここでもしてくれ」と要求した。イエスは言われた。「預言者エリヤの時代に大飢饉が起こったとき、エリヤは異邦人の地シドンの寡婦に遣わされた。また預言者エリシャはイスラエル人ではなくシリアのナアマンの重い皮膚病だけを清くした。そのように、預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と批判をされた。これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が立っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

この事件と先の荒れ野でのイエスに対するサタンの試みとは関連がある。荒れ野でのイエスの決断を実際の宣教の場においても実践することである。苦難の瞬間に立派な決心をしても、実践の場でそれを無にしてしまう人々が多い。片田舎の大工の息子イエスは突然その地方で有名になってしまった。彼は今、故郷の村へ戻つて村の会堂で話しをする。会衆は彼が何か素晴らしいことをするのを期待している。彼らには、メシヤが来て政治的また宗教的にローマの圧力から民を解放してくれるのではないかという期待と、洗礼者ヨハネによっておられたメシヤの興奮があつた。イエスは洗礼を受けた時に神の従順な僕であろうとする決断をしている。それを否定するようにイエスがそのかされるとすれば、それは正にこの時であった。イエスは会堂で聖書を読んだ。イザヤ61・1、2であつた。預言者はそこでバビロン捕囚からのイスラエル人の救出をヨベルの年の解放と重ね合せている。五十年毎のヨベルの年には全ての負債は清算され、奴隷が解放され、所有物は初めの持ち主に戻る。それは貧しい人々への福音Vであつた。バビロンからの解放もそうなるであろう。囚人は解放され、敵によって打ちひしがれていた者らは解放されるだろう。彼らは喜びながら帰還する。これは主の恵みの年Vとなろう。しかし、バビロン捕囚から実際に解放されて聖地に帰還しても、彼らが待ち望んだようにはならなかつた。それ以後の数世紀にも、望みは果たされなかつた。彼らは依然として圧迫され、征服され、うちひしがれている民であつた。そこで、預言者はもっと深いことを意味していたに違いないと考えられるようになった。預言者は来るべきメシヤの時代について語っていたのであろう。その時バビロンへの捕囚を招いた民の罪が処理されるだろうと。そこでイエスは大胆にもこの来るべきメシヤの時代を御自分に当ては

められた。この聖書の言葉は、あなた自身が今日聞いた時、実現したVと(21節)。ここでイエスのメッセージの中心はイエスが旧約聖書の預言の成就であるという事であった。歴史の現実では、昔のバビロン捕囚や彼らの時代のローマの圧迫よりもさらに深刻な困窮、さらに悲劇的な迷いが、さらに破壊的な圧迫が民の上にあった。サタンの支配である。しかし、サタンの領土に攻め込んで彼を征服するへもっと強い者V(ルカ11・22)がここにいた(イヨハネ3・8)。会衆の初めの反応は不明瞭であった。どうしてこの人は自分をこのように位置付けられるのか。イエスの主張を確かめる一つの方法は、奇跡を幾つ行うかであった。ここでもまた、試みる者の声が聞こえた。イエスがすまいと決心をしたまさにそのことを民衆は要求した。彼の主張は「しるし」を誇示することによってではなく、信仰によって確認されるべきであった。

旧約聖書 霊想

『恐れるな。たじろぐな』

イザヤ41章8〜16節

池の上キリスト教会牧師

島津吉成

イスラエルの国は、道德的にも宗

教的にも腐敗し、そのため国は弱体化し、ついにバビロンに滅ぼされてしまいました。そして、多くの人々は捕囚となってバビロンに連れて行かれてしまったのです。イスラエルの人々は、圧倒的な力を誇るバビロン帝国と比べて、自分たちの姿が虫けらのように小さく、弱い存在だと感じたようです。そのような中で、自分たちは神に見捨てられたと思う人々もいたようです。

これは、今日の私たちの姿でもあるのではないのでしょうか。様々な問題が山積し、その問題の大きさと自分たちの力を比べると、虫にも等しい自らの弱さを感じ、立ちすくんでしまふ、それがいまの私たちの姿ではないのでしょうか。

しかし主は、そのイスラエルの民に「恐れるな。虫けらのヤコブ」(14)と語りかけてくださったのです。では、「恐れるな」と語りかけてくださるお方は、どのようなお方なのでしょう。

一、臨在の神

主は言われました。「しかし、わたしは、イスラエルよ。わたしが選んだヤコブ、わたしの友、アブラハムのすえよ。わたしは、あなたを地の果てから連れ出し、地のほのかな所からあなたを呼び出して言った。『あなたはわたしのしもべ。』

わたしはあなたを選んで、捨てなかつた。』恐れるな。わたしはあなたとともにいる」(8〜10)。

主はアブラハムをちようどバビロンの地方から呼び出し、そして、約束の地へと導いてくださいました。アブラハムの生涯にも失敗がないわけではありませんでした。神の約束を待ち切れず、不信仰になり、大きな失敗をしてしまったこともあったのです。しかし、主はアブラハムを見捨てられませんでした。主は彼を悔い改めへと導き、もう一度立ち上げさせてくださいました。そして、主は彼を「わたしの友」とさえ呼んでくださったのです。良いときだけでなく、逆境のときこそ、共にいるのが真の友です。主は、まさに真の友として、どんな時にも共にいてくださり、支えてくださるのです。だから「恐れるな」と、主は語りかけてくださっているのです。

二、歴史を導く神

「ひとりの者を東から起し」

(イザヤ四一・2)とありますが、これはペルシャの王、クロスのことだと言われています。クロス王が瞬く間にバビロンを滅ぼし、その結果イスラエルは祖国に帰ることができるようになるのです。当時、バビロンが滅ぼされるなどということは誰も考えられないことでした。ところが

が、主はクロス王を立て、彼を用い、バビロンを倒されました。そして、イスラエルが祖国に帰る道を開いてくださったのです。神は歴史に翻弄されるお方ではなく、歴史を支配し、導かれるお方です。この神が共にいてくださる。だから「たじろぐな」と、主は言われるのです。

三、助けてくださる神

主は、「わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(10)と言われました。私たちは信仰の歩みの中で、思わぬところで躓いてしまうことがあります。ちようど、湖の上を歩き始めたペテロが、風を見て怖くなり、おぼれてしまったように。しかし、主イエスはすぐに手を伸ばして彼をつかみ、助けてくださいました。そのように、神はご自身の右手を伸ばし、私たちの腕をしっかりと握り締め、そして、助けてくださるのです。虫けらのヤコブ、待ちきれずに失敗をするアブラハム、風を恐れておぼれるペテロ、それは私たちの姿ではないのでしょうか。しかし、主は言われるのです。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしはあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ四一・10)。

東京03-5551-4558
理事長 大石 嗣郎
編集人 有馬 誠弘
定価 一部60円 千80円

第36回城北アシュラム報告

二〇〇一年二月二日(月)に会場当番は更生教会でした。遠方よりの参加者も多く、六十五名でした。十時よりの開心の時は島津吉成師で「バルテマイという盲人のこじき」(マルコ10・51)に、「わたしに何をしてほしいか」と恵みの主のお言葉に対して、心を開き、その切なる願いをはっきりと率直に「先生見えるようになることです。」と申し上げた時、彼はたちまち見えるようになった。待っていて恵みを賜う主の前に、開心する事を示された。祈りの細胞(1)が終わり、交わりの昼食には、お赤飯とあたたかい豚汁、みかんでした。午後は一時より石川深香子師による静聴はへブル書二二章が開かれ、聖言葉に聴き、恵みの

分ち合いのよき時をもった。福音の時は、原田謙師の奨励で今回の標語聖句、イザヤ書(40・31)「主を待ち望む者は新たな力を得」の聖句より、神は試練の中に疲れ果てた者を力づけ、強め給う御方である。そのために私達人間の側でも、聖言葉を聴き、主を見上げ、祈り、忍耐をもって主を待ち望め・と力強く語られ、励まされた。充滿の時は島隆三師によりもたれ、師の『おどろくばかりの』聖歌二二九、独唱や座長は自ら己が罪をさらけだして、恵みによって救われた証詞がなされるべきであると。参加者一同、本日いただいた数々のお恵みが十分に満たされ、又、分ち合い、感謝の裡に終わり、新たな決意をもって、主のからだである教会の御奉仕と伝道に励まんと決心しつつ散じた。
ハレルヤ「イエスは主なり」。



(報告 堀内 清)

はれるやさん

谷 牧 子



◆お詫びと訂正

第一二六号1ページの記事に不適切な表現がありましたのでお詫び申し上げます。編集者が原稿に責任を負うところ怠慢でありましたことを反省いたしております。ご指摘いただきましてお礼申し上げます。他意は勿論ないのですが、読む方の痛みを理解し注意することにおいて配慮に欠けるものでした。

1頁7行目から一段落の文章を次のように訂正いたします。

「このたびの短いツアーで見聞したインドは、根強い宗教社会を形成していて、少数ではあるがキリスト者たちの働きの重要であることを知らされ、スタンレーのもたらした足跡は大きいものであることを知らされました。殊に、日本の仏教社会の中での困難な伝道状況を思い合わせる感慨一入のものがありました。」

以上のように訂正いたします。



▼R・S・ヴェルマ、サトタル・アシュラム主事のご次男ディパク兄が2月20日ユカ姉と結婚されました。お祝福申し上げます。

▼向山自助牧師 去る四月三十日ご逝去。前連盟理事、前関東アシュラム委員長として良きご奉仕を下さいました。主の慰めを祈ります。

▼各地区アシュラムの予定を是非、編集者までご連絡ください。